



Viet Nam

学校名：品川区立京陽小学校

氏名：大井川 可奈

[担当教科：全科]

● 実践教科等：社会科・市民科

● 時間数：8時間

● 対象生徒：第6学年

● 対象人数：29人

1 単元名

『一人も取り残さない』社会の実現へ向けて ～SDGsを通して世界とつながる自分～

2 単元の目標

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ベトナムを通して、世界には異なる文化や習慣をもつ国があることを知り、互いに理解し合うことの大切さを考えるとともに、異なる文化や習慣のよさを見つけようとする。
- 世界の抱える諸問題と日本のつながりについて知り、国際協力の必要性を考えることを通して、持続可能で公正な社会の実現へ向けて活動する組織や機関などについて理解する。
- SDGsをもとに、持続可能で公正な社会の実現へ向けて自分ができることについて考え、表現することができる。

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る | 2 子供の多様な考えを引き出す |
| 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する | 4 考えるための教材を見極めて提供する |
| 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する | 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する |
| 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る | |

4 単元の指導について

(1)教材観

本単元は社会科『世界の中の日本』の学習内容をもとに構成している。

貧困、紛争、難民、感染症、人権侵害、環境破壊など、昨今の世界が抱える諸問題は、政治、経済、環境、社会が非常に複雑に絡み合っており、地球規模で統合的に解決していく必要がある。次代を担う児童に、これらの諸問題と自分とのつながりを捉えさせ、「地球の上に生きる一人」としての自覚をもたせたい。自分のできることをよく考え行動していこうとする資質を育むことをねらいとする。また、国際的視野が不可欠な現代において、異なる文化や習慣を理解し尊重するとともに、異なる価値観をもつ人々と共に生きる態度を身に付けることも重要である。

そこで、本単元では、我が国と経済や文化などの面でつながりの深い国の人々の生活を知ることを通して、世界には異なる文化や習慣があり、互いに理解し合うことが大切であることについて気付かせていきたい。一例として、ベトナムの文化や習慣を取り上げ、日本とベトナムのそれぞれの良さや面白さについて話し合わせ、異なる価値観を尊重することの意義について考えさせたい。

さらに、そのうえで、世界は様々な諸問題を抱えていることに目を向けさせ、自分の生活ともつながっていることに気付かせていく中で、持続可能で公正な社会を目指す組織や人々の存在を知り、これからの自己の生き方についても考えさせていきたい。

(2)児童生徒観

本学級の児童(男子17名、女子12名)は、社会科の学習に対する興味・関心が高く、特に、絵や写真や統計グラフなどの資料の読み取り、社会的事象に対する意見の交流などに対して意欲的に取り組む。

児童は、外国とのつながりについては、第5学年の『工業生産と貿易』の単元において、我が国と諸外国とが互いの「豊かさの交換」によって経済的につながっていることを学習してきた。また、第6学年の歴史の学習において、中国やベトナムなどアジア諸国とは歴史的・文化的な面で昔から交流があったことや、ペリー来航以来欧米との関わりが深まり、日本の近代化が進んだことなどを学習してきた。その中で、日本の発展と外国との結び付きに対する認識も少しずつ高まってきた。

しかし、海外に興味はあるものの、外国で起きている問題やそこに住む人と自分との結びつき、外国の人々と共に生きていくことの大切さには、まだ目が向いているとは言えない。本単元を通して、多文化共生の精神と、SDGsに示される『誰一人取り残さない』社会の実現を目指そうとする心と態度を育みたい。

(3) 指導観

指導に当たっては、まず身近なものを通して外国を見つめたり、統計資料や新聞記事などから日本と外国との関係をとらえたりする活動を行い、様々な視点から外国とのつながりを考えさせる。その際、最初に、「自分と関係があると思う他国の抱える問題」には目印のシールを貼らせておく。学習を深めた後に、「世界と日本」から「世界と自分」へとつながりの視点を広げている児童の意見を取り上げて共有させた上で、先に自分が貼ったシールを振り返らせることを通して、世界が抱える諸問題が「他人事から自分事」へ変容している自身の考えに気付かせていく。その後、SDGsを紹介し、持続可能で公正な社会の実現へ向けて取り組むことの意義を捉えさせる。

次に、問題意識をもった1カ国を選択させ、その国の抱える課題の解決へ向けて活動している組織や機関について調べ、まとめたことを報告させ合い、持続可能で公正な社会の実現へ向けて活動する様々な組織や機関など(国連、ODA、JICA、NGO、ユニセフなど)があることについて知る。その中で、一つ一つの活動がSDGsのどの項目の目標に寄与するのか目を向けさせていくことで、SDGsの捉え方を身に付けさせていきたい。

持続可能で公正な社会の実現へ向けて海外で活動する日本人の存在を知ったところで、実際にパプアニューギニアで活動していた日本人(元青年海外協力隊員)を講師として招き、その活動体験や苦勞、想いなどの生の声に触れさせることで、「国際協力を実際に行う」ことを身近なこととして捉えさせたい。特に、パプアニューギニアは児童にとって、昨年度の東京都のオリンピック・パラリンピック教育の一環である『おともだち国』として調べた国なので、興味をもって元隊員の話の聞くことができると考えた。

最後に、2030年(児童にとって25歳)の未来がこのままいくとどうなっているのか予想を立てさせる。そして、実際にはどうなっていてほしいのかSDGsをもとに話し合わせた上で、その理想の社会の実現へ向けて現実的に自分には何ができるのか、「日々の生活の中で」「中・長期的に」の視点で考えさせる。以上を踏まえ、この学習を通して得た学びと、これからの自分が行っていくと決めた取り組み(生き方)に対する決意を述べた手紙を、2030年の自分へ向けて書くことをもって本単元のまとめとさせる。自分への手紙は、小学校卒業後も愛着をもって折々読み返すことができるのではないかと考えた。25歳になったときにも読み返し、改めて「持続可能で公正な社会を実現する一員」としての自覚をもって生きようとする未来の児童の姿につながっていくことを期待したい。

5 評価規準

観点	社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
評価規準	世界と日本人としての自分のつながりに興味をもち、持続可能で公正な社会の実現へ向けて自分ができることを意欲的に考えようとしている。	世界の抱える諸問題と日本のつながりに関して考えたり、SDGsをもとに持続可能で公正な社会の実現へ向けて自分ができることについて考えたりして、適切に表現している。	写真・統計・地図などの資料を読み取り必要な情報を集め、調べたことや考えたことを分かりやすくまとめている。	世界の抱える諸問題と日本のつながりや、持続可能で公正な社会の実現へ向けて活動する組織・人々の願いや苦勞について理解している。
評価方法	ノート、発言	ノート、発言、ラウンドテーブルの記録、手紙	ポスター、発表	ノート

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	ベトナムと日本の違いについて考えよう 〈市民科〉	・ベトナムを通して、世界には多様な文化や習慣をもった国があることを知り、互いに尊重することの大切さに気付く。	・クイズを通して、ベトナムの人々の衣食住、生活、習慣、考え方などを知る。 ・日本人とベトナム人の共通点と相違点を見つけ、それぞれの国の良さについて話し合う。 ・ベトナムの人々の文化を体験する。 (ベトナム料理の給食、昼食後の昼寝体験)
2	ベトナムと日本とのつながりから国際協力について考えよう	・ベトナムと日本の関係を知ることを通して、開発途上国と日本との相互依存の関係に気が付き、国際協力の意義について考える。 ・JICA 職員としてベトナムが抱える問題を解決するためのプロジェクトを立案する活動を通して、日本の国際協力の在り方について考える。	・クイズと紙芝居を通してベトナムと日本の関係について知り、開発途上国と日本との相互依存の関係から国際協力の意義について話し合う。(ODA、JICAについて知る。) ・グループ毎に、各1枚の写真からベトナムが抱える問題を予想し、全体へ発表する。 ・JICA職員になり、グループ毎に問題解決へ向けた『プロジェクト立ち上げ会議』を行う。 ・全体へ、立案したプロジェクトのプレゼンテーションを行い、「持続可能となる支援か？」という視点で意見交換をする。 ・実際に、諸問題に対して日本が行っている国際協力の取組み(JICA 事業)について知ることを通して、日本の国際協力の在り方について理解する。
3	世界が抱える様々な問題と自分とのつながりを考えよう	・世界が抱える諸問題と日本とのつながりについて考える。 ・SDGs について知り、持続可能で公正な社会を目指すことの必要性に興味をもつ。	・他国の写真を見て、世界が抱える諸問題を予想する。 (貧困・人権・平和・環境問題などを表す写真) ・世界が抱える諸問題と日本との繋がりを知り、自分の生活とも繋がっていることを考える。 ・SDGs について知り、諸問題が 17 項目中のどの項目に関わるか考える。
4 5	持続可能で公正な社会を実現するために活動する組織について調べよう	・各国が抱える問題と、その解決へ向けて活動している組織について調べ、ポスターにまとめる。	・グループ毎に、各国が抱える問題と、その解決へ向けて活動している組織について調べ、ポスターにまとめる。(SDGs のどの項目に関わるかについても考える。※以下、『SDGs 項目分け』)
6	持続可能で公正な社会を実現するために活動する様々な組織について知ろう	・世界の抱える諸問題と、持続可能で公正な社会を実現するために活動する様々な組織があることを知る。	・グループ毎に、世界が抱える諸問題と持続可能で公正な社会を実現するために活動する組織について調べてまとめたポスターで、ポスターセッションをする。 ・世界が抱える諸問題の解決へ向けて活動する様々な組織や機関など(国連、JICA、NGO、ユニセフなど)があることについて知る。(SDGs 項目分け)
7	持続可能で公正な社会を実現するために、世界で活躍する日本人について知ろう	・持続可能で公正な社会を実現するために世界で活躍する日本人を知り、自分にもできないことがないか興味をもつ。	・世界の諸問題の解決に向けて世界で活躍する日本人(ゲストティーチャー:元青年海外協力隊員)の活動内容や苦勞・想いを知ることを通して、持続可能で公正な社会を実現するために努力する人々への感想をもつ。
8	持続可能で公正な社会を実現するために、自分ができていることを考えよう	・持続可能で公正な社会を実現するための一員として、2030 年の自分へ向けて手紙を書く。	・これまでの学習を振り返り、世界の抱える問題の現状をまとめる。 ・SDGs が目指す 2030 年がどういう未来であってほしいか、理想を話し合う。 ・持続可能で公正な社会を実現するための一員として、自分が取り組んでいくことについて考える。 ・以上を盛り込み、2030 年(25 歳)の自分へ向けて手紙を書く。

7 授業事例の紹介

小単元名【世界が抱える様々な問題と自分とのつながりを考えよう】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月8日(金)第5限 13:50~14:35

(イ)実施会場 6年2組教室

(ウ)本時の目標

- ・他国の抱える諸問題と日本とのつながりについて自分の身近な生活と結び付けて考え、友だちと意見を交流することができる。
- ・SDGsについて知り、持続可能で公正な社会を目指すことの必要性に興味をもつ。

(エ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	前時の学習を確認させる	○ベトナムが抱える諸問題に対し、JICAが行っている事業を思い出す。	一斉	・ベトナムと日本は互いに支え合っている関係がある中で、JICAが国際協力していることを想起させる。	
世界が抱える様々な問題と自分とのつながりを考えよう。					
展開 35分	他国が抱える諸問題を知らせる。 他国の抱える諸問題と日本とのつながりについて考えさせる。 SDGsを理解させる。	○数枚の写真から、他国が抱える諸問題を予想し、正解を知る。(フォトランゲージ) ○『他国が抱える諸問題を表す写真(上記)』と、『それらに関係のある日本側のことを表す写真』と、『その関係を表す情報が書かれたカード』で神経衰弱を行い、他国の抱える諸問題と日本にどんなつながりがあるのか考える。 ○グループで考えたことを全体で交流する。 ○持続可能で公正な社会の実現を目指して国連がSDGsを発表したことを知り、上記の諸問題がそれぞれ17項目中のどの項目に関わるか考える。	グループ グループ グループ 一斉	・後にSDGsの17項目との関連付けの手掛かりに繋がられるよう、「貧困」「住み続けられない」「健康被害」などキーワードを掲示しながら諸問題の解説を行う。 ・他国が抱える諸問題を知って感じたことや考えたことを交流させ、自分たちと関係のありそうな問題の写真に目印としてシールを貼らせる。 ・他国が抱える諸問題と日本とのつながりについて、気が付いたことや大事だと思ったことを交流させる。(ラウンドテーブル) ・目印として貼ったシールに着目させ、「地球上で起きている諸問題が他人事から自分事へ変容」している児童の発言を取り上げていく。 ・SDGsを絵と動画で紹介する。 ・SDGsの17項目のアイコンを示したワークシートを配る。	【思】他国の抱える諸問題と日本とのつながりについて自分の身近な生活と結び付けて考え、友だちと意見を交流している。(ラウンドテーブルの記録、発言) 【関】SDGsについて知り、持続可能で公正な社会を目指すことの必要性に興味をもっている。(ノート)
まとめ 5分	本時の学習をふり返らせる。	本時の学習をふり返る。	一斉	・次時の予告をする。	

(2) 授業の振り返り

導入では、世界の抱える諸問題として、開発途上国 6 各国の写真を各1枚ずつ提示し、それぞれどんな問題を表しているのかをグループ毎に予想させたことで関心・意欲を高めて学習へ入っていくことができた。それぞれの写真が意味する諸問題の現実を知ると、児童は、「知らなかった」「かわいそう」と驚きの声を上げていた。この各諸問題の中で、「自分と関係があると思う問題」をグループ毎に話し合せて選ばせ、シールを貼らせた。すると、昨年、5年生の貿易の単元で学習していたこともあり、「自分たちが食べているチョコレートの原料のカカオは、多くがガーナから輸入しているから『児童労働』は自分たちと関係している」という理由から、『児童労働』を意味する写真にシールを貼ったグループが多かった。それ以外はあまり貼られなかった。その後、『他国が抱える諸問題を表す写真(上記各6枚)』と、『それらに関係のある日本側のことを表す写真』と『その関係を表す情報が書かれたカード』で神経衰弱を行い、それぞれの諸問題と自分とのつながりについて、気が付いたことや大事だと思ったことを交流させた。その中では、「自分たちが知らないで大量に消費していたせいで外国では大変なことに…」「環境問題は地球全体に関わるから日本にだって関係ある」「海外に行かなければ自分には関係ないと思っていたのに…」「全部の問題が他人事じゃない」「知らないって怖いな」「どうしたらいいんだろう」「(前時を受けて)募金するだけじゃ“持続可能となる支援”じゃないよ」などの意見や気付きを交流さ

せる姿が見られた。児童労働、飢餓、環境問題、感染症、紛争、難民など、遠い国々が抱える諸問題を初めて知った児童の驚きは大きかったが、最終的に、実はこれら全てが自分とつながりがあることに気が付いたときの衝撃はさらに大きかった様子が伺えた。最初は「知らなかった」「かわいそう」と言いながらもどこか他人事だったことが、自分事に変容し、複雑な表情を浮かべていた。経済、政治、社会が複雑に絡み合った問題に直面している地球の実態に気が付いたところで、25歳頃(2030年)には地球はどうなっているだろうと問いかけると、「このままではまずい」というつぶやきがあった。そこで、2015年に国連サミットで採択されたSDGs(2030年を目指した「持続可能な開発目標」)について紹介したところ、多くの国の人が解決へ向けて立ち上がっていることや自分たちも解決へ向けて関わっていけることに、興味や希望をもったことが伺える内容がふり返りの中に書かれていた。

課題については、【9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策】にまとめて記す。

(3) 使用教材

< 第1時限 >

- ベトナムクイズ(現地で撮影してきた写真と動画を使用)
- 少数民族のカトゥー族が作った工芸品
- ベトナムの文化体験で用いた、ベトナム料理(フォー)と呉座(昼寝体験)

< 第2時限 >

- 紙芝居『なぜ国際協力?』を作成(世界の国数クイズ、世界における開発途上国及び後発開発途上国の地図、各国の食料自給率を表すグラフ、各国のエネルギー輸入依存度を表すグラフ、日本と開発途上国との相互依存の関係を表す絵図、ODA・JICAについての解説等)
- ベトナムでのJICA支援事業を紹介するボード(事業名・写真・現地取材した方の発言)を作成

< 第3時限 >

- フォトランゲージ用写真(各国の抱える諸課題を表す写真)と解説カード(キーワードのみで表示)
- 神経衰弱用カード(各国の抱える諸課題と日本との繋がりを表す絵図・写真・新聞記事・グラフ等)
- 統計グラフ(国内の割り箸の輸入率とその相手国の割合、年間食料廃棄量、世界の食料援助量)
- 本校の給食室で一日に出る残飯を重量計に乗せている写真
- 加工食品の空き箱・空き袋(成分表示に『植物油(パーム油)』があるもの)
- 紙芝居『誰一人取り残さない社会の実現を目指して』を作成(SDGs紹介)
- ラウンドテーブル用紙

< 第7時限 >

- ラウンドテーブル用紙(SDGsが目指す2030年がどのような未来であってほしいか、そのために自分たちが取り組みたいこと(短期的・中期的・長期的行動指標)を書き込めるもの)
- 手紙用ワークシート

(4) 参考資料等

- ・『身近なことから世界と私を考える授業』開発教育研究会(2015)
- ・『国際協力のレッスン 地球市民の国際協力論入門』牧田東一(2013)
- ・『国際協力 アクティヴ・ラーニング』佐原隆幸・徳永達己(2016)
- ・『1人ひとりにできること 1人のためにできること』JICA(2008)
- ・『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら 第5版』開発教育協会(2016)
- ・『パーム油のはなし』開発教育協会(2014)
- ・『日本と出会った難民たち』根本かおる(2013)
- ・『海を渡った故郷の味』難民支援協会(2013)

8 単元を通じた児童生徒の反応/変化

- ・『ベトナムへ行ってみたい度』を授業前と授業後に0~100%で数値化させたところ、授業前は平均34%に対し、授業後は94%になった。
- ・外国への興味が高まり、特に、開発途上国を巡る旅がしてみたいと語る児童や、図書室や学級文庫で関連図書を借りる児童が増えた。また、外国語への学習意欲の高まりを語る児童もいた。
- ・調べ学習後のポスターセッションでは、世界の抱える諸問題について「知ることが面白い」という意見に対し、「知らぬは罪」との発言をした児童の影響により、授業後も世界が抱える諸問題について自主的に調べてきたり、情報共有し合ったりして盛り上がっている児童の姿が見られた。もともと海外への興味は高いクラスであったが、興味の幅が広がった。
- ・自分も国際協力に関わっていきたいとの意欲が高まっている。給食が残らないよう、児童が率先して残っているおかずの量を確認して声を掛け合うようになり、全員で協力して完食を目指そうという学級の雰囲気を作るようになった。身近でできる国際協力への意識も高まっている。「水の出しっぱなしは止めよう」「鉛筆には名前を書いて最後まで使おう」などの声も飛び交うようになった。また、将来の夢の一つとして、「国際協力にかかわる仕事をしてみたい」と語る児童が増えた。特に、元青年海外

協力隊員の話聞き、「自分も隊員になりたい」と憧れをもった児童が数名いた。

- ・『世界の抱える諸問題と日本とのつながり』や『SDGs』について、「親が知らなかったから家で宣伝してきた。」などという児童がいた。他にも、家庭で話題にしたという報告が多く上がった。終末活動である 25 歳の自分へ宛てた手紙の中に、自分ができることの一つとして、「自分の周りの人に伝えて知ってもらい、みんなで考え取り組んでいくことが大事」という旨の記述が多かった。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

【成果】

- ・ベトナムや JICA について、実際に担任の見聞きしてきたことが題材であったため、児童にとって本やインターネットを調べるよりもイメージしやすく、高い関心と理解を示すことにつながった。ベトナムの文化体験活動においても、現地で体感してきたことを伝えながら取り組むことに繋がり、異文化への興味が高められた。
- ・遠い国で起きていることは漠然と他人事のように思っていた児童にとって、自分の生活につながっているという課題意識をもつことができた。
- ・児童にとってバブアニューギニアは、昨年度の東京都のオリンピック・パラリンピック教育の一環である『おともだち国』として調べた経験があったので、バブアニューギニアで活動していた元青年海外協力隊員の話聞いたことは、バブアニューギニアについても国際協力についても現実味を帯びた話として受け止めることができていた。
- ・授業後の日記に、「ベトナム人は仕事をたくさんしてお金を稼ぐことよりも家族と過ごす時間が大事と言っていた。お金はあっても心を失ってはいけぬ。日本は貧しい国に経済的にも豊かになれるように支援している。それは良いことだと思うけど、経済的に豊かになろうとすれば、戦争が起きたり、地球の環境が破壊されたりして、結局苦しむことになると思う。本当の豊かさとは一体何なのか難しいなと思った。これから私たちは何をすべきなのか考えていかなければいけない。」と記した児童がいた。『国際協力の在り方』と『豊かさの本質』について深く考えるきっかけとなった。
- ・終末の、2030 年（児童にとっては 25 歳）の自分へ手紙を書く活動の前に、『SDGs をもとに考えるとどういう未来であってほしいか、そのために自分たちが取り組みたいこと（短期的・中期的・長期的行動指標）』を書き込める用紙を囲んでラウンドテーブルを行ったことにより、自分の考えが深まり、より具体的なイメージをもって手紙を書くことにつながった。

【課題】

- ・“地球の抱える問題”というテーマを『環境・平和・人権・貧困』の視点で捉えて構成したのは良かったが、児童に活動をさせる上で提示した写真が多く情報過多になり、時間的にも理解度的にも飽和状態であった。理解の速い児童には学習意欲を高く持続させることができていたが、理解に時間のかかる児童にとっては答えを求める形の授業となり消化不良を起こさせた。もっと自由に話し合わせる時間やじっくり考えて児童の中から生まれた気づきを共有させる時間を確保したかった。
⇒事後の調べ学習で何を調べさせるべきかをもう少し精査することで、提示資料の枚数を減らすことができるのではないかと。疑問や「もっと知りたい」という思いを一番高くもたせることができる程度の情報量に抑えることで、児童の調べ学習へのさらなる意欲向上にも繋がる。

10 教師海外研修に参加して

- ・ベトナムへ行く事前・事後の研修、及び、現地での体験や取材が大変充実しており、また、そこから多くの刺激を受けたことによる教師自身の学ぶ意欲も高まり、この数か月間で膨大な量の情報が得られた。それらを消化し、整理していく作業の中で、実際の開発途上国が抱える課題と、相互依存による日本人との繋がりや、地球の抱える問題に対する当事者意識を強く実感することができた。子どもたちに何を伝え、考えさせたら良いのか、その視点を教師自身ももつことができた。
- ・都市部から農村部まで、様々な場所へ連れて行ってくださった中で見たベトナムは、“開発途上国”に対して抱いていた暮らしや社会のイメージとは大きく異なり、ステレオタイプが取り除かれたことによって開発途上国の持つ多様性にも目が向けられた。
- ・たくさんのベトナム人と直接触れ合える機会が多くあり、多様な価値観に出会うことができた。特に、「豊かさ」については改めて見つめ直すきっかけとなり、今後、子どもたちとも共有し共に考えていきたいテーマの一つになった。
- ・校内では、授業実践とともに、教職員向けに本研修での学びを報告させていただく場をいただいた。『世界の抱える諸問題と日本とのつながり』にはじまり『開発教育／国際理解教育の意義』についてまで熱心に聞いてくださる先生方の姿があり、「大人でも知らなかった」「改めて大事なことだと思った」「面白い」「興味がある」など想像以上の反響があった。今後は、本研修を通じて得た知識や情報・写真の共有化を図り、系統的に開発教育／国際理解教育を取り入れていけるよう他学年や他教科での単元開発や教材化を進めていきたい。